

4. 種苗放流技術開発試験(4) メイタガレイ

山田英明・太田武行・松田成史・田中一孝

目的

漁業者からの要望のみならず(財)栽培漁業協会(以下協会)・水産試験場沿岸漁業部(以下水試)がこれまで培ってきた経験を活かし、栽培漁業として将来性・可能性が高い新規魚種について、具体的な放流技術(時期・場所・サイズ等)の開発を行い事業化に結びつけていく。

各地で取り組まれている栽培漁業で放流効果の低迷が著しい場合は、その原因を究明し、効果向上につながるよう改善策を提示する。

試験生産されたメイタガレイ種苗を標識放流し、再捕報告による放流効果を検証する。

方法

a) 試験放流

傭船により、鳥取市気高町沖水深約10mの海域(図1)において、平成21年4月30日に全長6cm~10cmの種苗を合計789尾放流した。種苗は、水試(旧栽培漁業センター)と協会が試験放流用に平成20年12月から種苗生産したもので、放流当日までに全長74mm以上の個体77尾に黄色のチューブタグを装着した(図2)。種苗は海水を入れた大型のビニール袋に收容し、酸素充填したあとゴムバンドで結束して軽トラックに積載して浜村漁港まで運び、漁船に積み替えて放流地点まで運び、潜水して海底で放流した(図3、4)。種苗の再捕については、小型底びき網(以下小底)従事者からの再捕報告により場所、大きさ等を確認した。

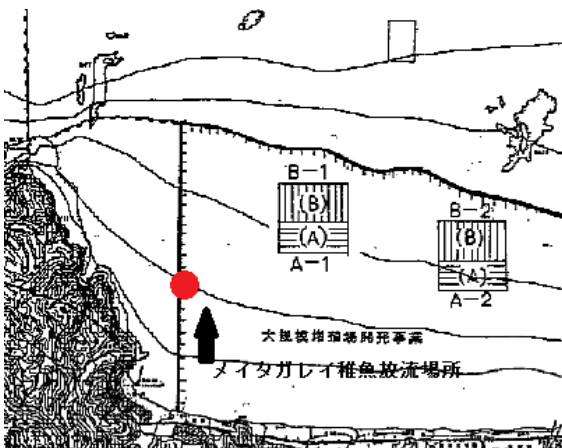


図1 メイタガレイ放流位置(H22.4.30)

結果

a) 放流魚の再捕

平成22年3月13日現在までのところ、平成20年度に放流した標識放流魚の再捕報告はない。平成19年度に放流した標識放流種苗について、放流後2年10ヶ月経過した時点で放流地点から西方海域(水深45.5m)で1尾の再捕があった。4ヶ年の放流再捕結果について表1に示す。

平成20年度及び平成21年度の放流魚の再捕がない原因については、放流尾数が非常に少なかったことが考えられるが、平成19年放流群が約3年経過した時点で再捕されたことを考えると今後も再捕される可能性があり、引き続き小底操業者を中心に再捕協力をお願いする予定である。



図2 標識放流したメイタガレイ種苗



図3 海底からの潜水放流(2009.4.30)
ナイロン袋に酸素・海水・種苗を入れ、口を閉じたまま海底まで運び、海底で紐をほどいて種苗を放流する。



図 4 放流直後のメイタガレイ稚魚

表 1 メイタガレイ 標識放流実績(H18～H21年)

年	標識放流		再捕実績(尾)					合計	
	全長 (cm)	放流数 (尾)	標識種類	2006年	2007年	2008年	2009年		2010年
2006年	10.91	2,124	フイブタ'	28	5	0	0	0	33
2007年	12.34	1,017	"	-	15	11	0	1	27
2008年	9.37	723	"	-	-	0	0	0	0
2009年	8.36	77	"	-	-	0	0	0	0

今回、放流用の種苗生産の不調から、標識装着可能なサイズの稚魚を十分に確保できなかったため、標識放流数は過去4年間で最も少ない結果となった。また、平成18年殻の放流数も減少して平成20年放流群の再捕も未だない。

このため、本年度の放流種苗からはメイタガレイの移動や成長等の知見が得られず、放流事業の継続及び中断等の可否についての検討が出来なかった。

今後、メイタガレイの栽培漁業対象種としての位置づけを判断するにあたり、100尾程度の少量放流では再捕もなく検討することが困難なため、放流数の量的確保が必要と考えられる。